

大子町社会福祉協議会

松川明子さん（三十代）

神長美咲さん（三十代）

### 責任の重さと不安を乗り越え

ボランティアセンターの運営についてお話しさせていたただきたいと思います。社会福祉協議会は、大子駅前文化福祉会館まいんにありまして、役場の近くです。敷地内の駐車場までは水がぎりぎり来なかったのですが、被害はありませんでした。十二日に水害が発生しまして、翌日の十三日に職員が集合し、災害ボランティアセンター立ち上げの準備をしました。

また、社協で運営している事業所も被災した事業所があったので、そちらの事業所を片付ける職員もいました。常総市や広島の水害の時に大子社協の職員もボランティアセンター運営の手伝いに行っていたので、少し知識はあったのですが、まさか大子町がここまで水害の被害にあうとは思わなくて、十三日に集合した時には職員全員が不安に思っていたと思います。そんな時に、茨城県の社会福祉協議会の職員の方に駆けつけていただいて、ボランティアセンターの運営の助言とかお手伝いをしていただきました。また、東海村社協さんは、ボランティア活動で今後スコップとか一輪車とか必要になるよ、ということですのでそういう資料を持

ってきてくれました。徐々に水害被害の状況が分かるにつれ、ボランティアセンターが担う役割の重要性に押しつぶされるような気持ちと、大子社協は職員の人数が少ないので少ない職員で対応ができるかな、という不安が大きくなっていました。でも被災された方はもっと大変なので、頑張らなきゃいけないという気持ちももちろんありました。

### 活動依頼の判断の難しさ

十四日はボランティアセンターの準備をして、十五日にボランティアセンターの開設とボランティアさんの受け入れを行いました。運営していく中で大変だったのが、被災した方からの活動依頼をどこまでボランティアセンターで行っていいのかという判断をすることです。一般の方にボランティアさんで来ていただいているので、あまり危険なことではできない、というところがありましたので、その時は職員間でミーティングを行い、みんな判断をしました。ボランティアセンターで行えない活動はどこにつなぐかとか、社協以外の機関でどういうところがあるか、っていうのも情報収集を行いました。また、多くのボランティアの方に協力いただき助かったのですが、予想以上の人数の方に来ていただいた日があったので、活動場所とボランティアさんを調整するのが大変だ

ったということもあります。その辺は徐々に、ボランティアさんは事前登録制にすることができたので、スムーズに行えたかな、と思います。

### 被災者に寄り添う

その後は水害の現状の把握とか、活動を依頼したいけど自らボランティアセンターに依頼ができない方もいらっしゃると思って、職員で地域に訪問も行きました。訪問すると、まだまだお手伝いが必要な方や、被災されたことで精神的にづらい思いをされている方がいらっしゃいました。被災された方で見守りが必要な方は、ボランティアセンターの活動が終わっても、寄り添い訪問、という名前で令和三年の三月まで訪問を続けました。

ボランティアセンターの運営は、大子社協の職員だけでは運営できなかったとあって、役場や消防、商工会、職員の家族等の町内の方のご協力もあつたり、他の市町村社協の方が応援に来ていただいたり、あとは支援Pと言われる方や、プロボノという災害支援のプロの方の協力もあって運営ができたと思っています。ありがとうございます。



土嚢袋に書かれた応援メッセージ